

ついで考えたもの（現代との比較でとらえたものもいた）、そして、戦いの陰で、一番悲しみのしわよせが来るのは女性だ、と訴えるものもありました。

授業方法については、「古典なのに『ムズカシイ』と感じないで、『スッ』と作品の世界に入ることが出来た」「登場人物の心情や情景がよくわかった」「何度も読むから、意味が自然に感じられた」「音響を考えるために情景をいろいろに想像した。すると、古いはずのものが生き生きと感じられた」「次は読み手をやってみたい」「他のものもテープにとりたい」等、楽しかった、クラスがまとまってよかった、という感想を得られました。

今回の授業を通して、生徒たちが古典の時間を積極的に、そして楽しく感じてくれたことは、今までに比べると、大きな進歩だと思います。が、今回生徒たちが、「おもしろい」「楽しい」「興味を持った」と感じたのは、『平家物語』そのものよりも、「テープに録音する」「自分たちの声を聞く」という点に、多くあったのではないでしょうか。今回は時間切れで、テープを聞くところまでで学年が終ってしまいましたが、彼女たちが「おもしろい！」と感じた後、再び授業を持って、内容そのものをもう少し丁寧に教え、そしてより深く物語を理解するためには、やはり文法が必要なのだ、と感じさせる時間にできたらよかった、と思いました。

おわりに

まだ専攻科の学生の頃、高校時代お世話になった先生が、「教

師には、大道芸的な要素というものが必要なのではないかしら」とおっしゃったのを記憶しています。先生は私に向ってではなく、半ばひとり言のようにおっしゃいました。

授業をしていて、非常に平坦な、自分がかもし聞いていたら退屈してしまうような時間が流れているのに気付くことがあります。また、私の声が、生徒の耳に入ってゆかない、入ってもすぐに通りすぎているのを実感する時があります。そんな時、決まって浮んで来るのがこの言葉です。

（麴町学園女子高等学校）

——現場からの報告——

未完の作文

母親が酒乱の父親と離婚したという家庭の女子生徒が、そのいきさつを書いてきた。母親側に加担しての作文で、父親への憎しみと怒りの言辞に満ちている。作文としてはまとまっていたが、父親への批判が一方的なので二、三度の書き直しをさせた。そのうち、父親の悲しみにも目が向き、内部に混乱が生じたのか、書けなくなり、作文としては「未完」に終わった。

作文の評価はむずかしいが、私は、認識の深化を評価して、高い点をつけた。

（N）